OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	漢民族の成立に就いて
Author(s)	小川, 琢治
Citation	懐徳. 1931, 9, p. 137-149
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88840
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

漢民族の成立に就いて

小川琢治

一、總說

支那の現在の住民は本部と蕃部（西藏蒙古ズンガリア）とにそれ〳〵異つた土着民がゐる。又た本部の中にも南方の山間には苗族その他の蕃人がある。これ等の民族は大體に於いて支那文化に接觸して次第に同化されたもの、將さにされんとするものが多く、清朝の二百餘年の統一した行政の下にこの傾向は盛んであつたが、その蕃部は今尙ほ容貌言語風俗の頗る異つたまゝであり、又た大多數を占める本部の漢民族と雖も、地方的に言語のダイレクト（方言）の相異があり、容貌骨格も一樣でない。この相異は日本に於ける如く互に隔離した地方に永く生活してゐる爲めに同一の祖先の子孫たる民族の中に地方的差異が出來ただけではない樣である。此の如き原因もあるとしても、それよりも寧ろ元來異つた民族が同化されて漢民族といふ龐大なるものが出來たので、部分的に古い異民族の血液が流れてゐることが、その主もな原因であると考へられる。

現在の漢民族を理會するには各地方の古い民族と漢民族の間の關係を明にせねばならぬが、この方面の眞相を具體的に知らんとするには、材料が何れも斷片的なもので、先秦から兩漢六朝までの零細

なる材料から纏めて作り上げるのは容易な事業でない。今日まで滿足すべき研究のないのは已むを得ない。

この研究中最も根本的な調査法は現在住民に就いて各地方に於ける言語體質骨格等を調べて種々の型に區別して、その分布狀態を明にするに在つて、歐洲では既に行はれて頗る面白い成績を擧げてゐる。然るに支那では人口すらも三億何千萬であるか、四億何千萬であるか見積り方によつて億といふたに違いが出るといふ現狀であるから、これは全く望めない

此の頃人類學的及び考古學的の發掘が滿洲北支那蒙古等で行はれ始めたので、先史時代の方面の研究が多少出來て參つた。その結果は日本に未だ知れない石器時代から金石併用時代までの遺物遺蹟が發見されて、夏殷周三代の民族の傳說の外に遺物が分りかけてゐる。然しながら是れとても遺物と文獻を結び付けて上古の住民の狀態を復原し得るまでには進歩してゐない。

此の如く種々の困難があつて我々の支那の住民に就いて有する智識が正確を缺いてゐる。然れども文獻を研究すれは幾らかは民族の起源、移住及び同化の經路等が知れるから、私自身の調べて獲た所を茲に述べて見る。

二、漢民族の起源

現在の支那本部に大多數を占める住民は之を我々は漢民族と呼ぶが、その實體は頗る複雜な部分的

の種族から成つてゐるらしいことは茲に述べた通りである。

彼等は支那本部に原とからゐたもの即ち原住民であつて、そのまゝ今日四千餘年間續いて住居するものかといふに、そうではなくて漢民族の主體は外來人であることは殆んど疑を容れない。この事實は從來最も確かな古代の歷史の文獻とされた尙書(書經)や之を基礎として作つた史記などには左ほど明かに記載されてゐない。が、それでも夏殷周の三代の中周人だけは、西北の方から三川の流域に入り込んで國を建て、終に文王武王の代に至つて殷に代つて天下を統一したことだけは明かに知れてゐる。その前二代の國を建てたといふ夏人と殷人の場合は土着人か外來人かといふ點が明かでなかつた。然しながら私自身が經書正史以外の材料から段々研究した所では、同じく外來民族で而かも何れも西北の方から周人に先つて支那本部へ入り込んだものらしいことになるのである。

之を確め得るのは神話及び傳說を集めた山海經、楚辭天問、逸周書王會、穆天子傳などの書物で、清朝に支那の書物を分類して整理する時に小說の部類に突つ込で仕舞つたものなどがある。これ等は儒家の主義で整頓せなんだものであるから、春秋戰國に行はれた說話が原の形そのまゝに保存されてゐる。即ち戰國頃の支那民族の間に行はれた世界といふものが、前の三書で知れ、王會は成王即位後に諸侯を集め蕃人を來會せしめた時の記事である。穆天子傳は周代の初期に中央アジアの祖先の鄕土へ穆王が旅行した記事で、晉代に至つて魏王の古墳の盜掘によつて偶然發見された竹簡に書いた戰國時

代の古簡である。

これ等に依れば漢民族の祖先は崑崙山を中心としてその周圍に世界即ち種々の民族の住んだ國があるものと考へてゐる。前に述べた印度人の須彌山の周圍に四大洲を想像したのと全く同じ考へ方である。この山から四方に流れ出る河の中で東に流れるのが黄河で、これが支那人は禹貢九州の地であるとする。漢代に降つて出來たかと想はれる水經といふ地理書などに至るまでこの考へ方は續いてゐる。即ち卷一河水の篇に

崑崙墟在西北、去二嵩高一五萬里、地之中也、

其高萬一千里、

河水出其東北陬、屈從其東南、流入渤海、云々

この文は山海經と禹本記に據つたもので、漢代には山海經圖といふものがあつたから、多分はそれに示した黄河の河道を文に綴つたものらしく、圖が散佚してゐるから後世の考證家が各自身の考へ方で之を解釋せんと試みて居るが、薩張り正鵠を得たものがない譯である。

この海内崑崙之墟在西北といふのは海内經の文で、山海經には五藏山經の西山經卷二に槐江之山の次に崑崙之丘といふ山を載せてゐる。

西南四百里曰崑崙之丘、是實惟帝之下都、……河水出焉、出山東北隅也而南流東注無達山名赤水出焉出山東南隅也

而東南流、注氾天之水（註脫漱）洋水出焉（出山西北隅或作清）而西南流注于醜塗之水（註脫漱）黑水出焉（亦出西北隅也）而西流于大杆…

この無達は北山經に出る鎒于毋逢之山で無と毋は同字で、逢は達の誤字らしく、その場處は漢の莫顒縣を置いた處で、莫と無毋とも通用し、穆王が西征する時に河神を祭つた氾多之泭といふ河水之所南還（還回也音旋）で、今は包頭（博托河なり）といふ鐵道の終點に當り、今もこの驛の南に河神廟がある。

穆天子傳によれば穆王は洛陽（雒邑）を出發して北に向ひ、大行山を越えて汾水の流域に下り、之を溯つて太原の北で滹沱河の水源地に出で、雁門嶺を越えて桑乾河（當（雷）水）の水源から西北に折れて歸化城の邊を通つて包頭に出で、それから北屈河の幾つにも分岐してゐる處即ち九河を過ぎて、西夏に向つて、安爾泰山脈の東南端の南の斜面に在るオアシスに國を建てた西夏に達した。それから南に引返して、今の寧夏の西の賀蘭山脈に沿ひ黄河の西北に在る膜晝（丑に通用するか）なるもの部落に達し、この人に封土を與へて殷人の主とし、先祖の祀を主らせた。これは本部にゐた殷人の一派はこの時も膜（亳）某と名乘つてこの邊一帶を占有してゐたことを語る事實として面白いのである。この間穆天子傳卷一と二との間に西夏往復の記事が缺落してゐる爲めに、西夏に關して詳細を知ることが出來ぬは遺憾である。

穆王は更にその西に行つて昆侖之丘赤水の陽に達し、穆天子傳には

去日辛酉天子升于昆侖之丘、以觀黄帝之宮、而封豐隆之葬、

といひ、こゝで昆侖の丘を祭つた。又たその西に行き春山に升り赤烏人のゐる處へ行つた。その

赤烏氏先出自周宗、大王亶父之始作西土、封其元子吳太伯于東吳…封其嫡臣長季綽于春山之陰、妻以元女……以爲周室主

といふ文から明かに殷人の西に周人の鄉土があつたことが知れる。又たこの邊一帶を西土と呼び、その殷人の土地を西膜即ち西亳と呼んでゐる。經書でも史記殷本記などでも亳は殷人の都の固有名詞の如く用ゐられてるが、新疆省では今も沙漠へ山から流れる河のある泉地に樹木まばらに生ゐた所聚落が出來る。この如き土地をバグと東土耳其語で呼ぶ。これから推せば亳即ちバグは、邑といふ意味の字で、周人は大邑を洛陽に營んで諸侯を會する首府とし之を維邑と呼んだが、若し殷人であつたらば維亳と呼んだものと想はれる。而して西膜といふのはこのオアシス地方の總稱に用ゐられて固有名詞の様になつたらしい。

私共の調べた結果を湊合すれば、西夏だけは位置が確定せぬが、夏殷周三代の鄉土は安爾泰の東南麓にゐた西夏人とその南の天山から北山にかけてゐた西膜(亳)人と崑崙の北麓即ち甘肅省の北山の南にゐた西周人を代表する赤烏人との代表する地方で、各東南に移住して支那本部へ入り込んだものと考へてよいことになる。

この三民族の關係は元明清の間に金が支那本部から逐ひ卷られても元の滿洲の山地に引籠り、蒙古

人も明人に逐ひ出されてから相變らず今の蒙古の沙漠の地方にゐた如く、同じ民族の一部だけの興亡盛衰を見たに止り、周の支那本部を占領した最初の百年を經過した頃即ち穆王の時にはまだ何れも中亞に國を建てゝゐた譯である。

秦人の祖先を見るに穆王の御者として有名な造父も亦た殷人であることは、秦本紀にその祖先大業の母女脩が玄鳥の卵を呑んで生んだといふ、簡狄が契を生む時と同じ傳說を載せたので察し得る。その後周の東遷してから岐山の平陽に移り、寧公に至つてその近傍に兵を出して蕩社を伐ち亳王と戰ひ、蕩氏を取つたといふが、これも同族で殷人は三川盆地の西北邊に澤山ゐて、その西の方の所謂西戎に續いてゐる。秦の繆公が西戎の覇となつたといふのは、秦は熟蕃で西戎は同族の生蕃の關係を持つてゐたので、それ等を服從させたに止る。甘肅省方面に起つた殷と秦との關係は滿洲に起つた金と清との二代の關係であることは一寸面白い、所謂歷史は繰返すといふ格言の通りである。

三、同化作用の進行

この三民族を人種學上から如何に區別し得るかは問題であるが、少くも言語に多少の相異があることは確かである。殷人の亳が周人の邑に當るトルコ語系の言葉であるのは前に擧げた通りであるのみならず、この外に穆天子傳には尙ほ西膜の所謂何と對譯した語が若干ある。その一に

甲申至于黑水、西膜之所謂鴻鷰

といふ文が注意される。黒は支那の近音でヘーであるが、鴻鸘は近音 Hung-lu で古音は多分 Khung-lu Kung-lu 即ち土耳其語の Khu-ru＝Khara といふ日本語のクロと同じ語である。この語が漢字では略せられて下の一音 lu となり、盧、瀘、潞等の字でも示され、又は li となり黎、驪等の字でも示されることになつて、箇々の言葉の語源が次第に知れなくなつてゐる。

この黒と鴻鸘の例から觀れば、周人は西藏族の羌と同系で、單綴の言語を持ち、之に反し殷人は複綴の土耳其族の語系に屬することになる。之と同じ語系の準噶里人即ち東土耳其族は上古の西膜の土地に今尚ほ連綿と住居してゐることは面白い事實である。

尚ほ更に進んで考ふれば、殷人は恐らくはその北にゐた夏人と同しアルタイ語系に屬し、何れも西洋古代の北方民族で最も重要なるスキタイ Scythians 民族の東方の一支を代表するものと考へてよいかも知れぬ。

この三民族の中夏殷兩族は早く支那本部に入住したのであるが、夏人の國は山西汾水盆地を中心とし、その他には黄河の河口平野には少し進出してゐた位で、餘り廣くは分布してゐなかつたらしい。越王句踐は禹の後であるといふ傳說があつたりするが、どれだけ信じ得るか疑はしい。若し事實であるとすればその東南に最も遠く進出したものとなり周人の最も東進した吳太伯に逐はれて更に南へ行つたかも知れぬ。之に反して殷人の方は大平野に廣がつてゐたことは確かである。武王が牧野で殷の

紂王を破つた後に、この殷人（書經などには殷の頑民といふ）を鎭壓するのに隨分骨が折れて、周公が雒邑（今の洛陽）に首府成周を營んだのである。それは豐鎬では遠過ぎるから已むを得なんだのである。

周代は戰國の末まで三十七王八百六十七年續いたといふ。この間に同化作用が漸次行はれたもので、文武周公成王の間に宗室や功臣を公侯伯として封土を與へて、被征服者の子男の小國（何れも土着の民族の國）の間へ犬牙錯雜して配置し、次第に之を併合し、春秋十二國となり戰國となつた。この間に文化が榮え同化作用が大に進行した筈で、秦が六國を亡して天下を統一するまでに既に漢民族の文化の範圍は大平野の全部と江蘇浙江までの沿岸平地に廣まつてゐた。

この同化作用は周の封建制度の下に行はれたのであるが、この封建といふのは日本の王朝以後に武家政治が行はれて出來たものとは性質が非常に異つてゐる。これは羅馬人が新たに領土を開いて、そこに「コロニア」を設けて拉丁文化が廣まつたのと稍似た所がある。支那の周禮などに見ゑる田制などもこの植民地の設定に當り行はれた地割りの方法であつて、孟子が滕といふ晉の南の小さい國に勸めて行はんとした井田といふのは當時行はれた地割の變換であるから、大變その行き方が異つてゐる。この點を考へないで從來井田のことを論じてゐるのには見當違ひの議論が多い。

春秋時代の五覇の第一に數へる齊の桓公の功績は孔子が之を輔けた管仲を推賞して管仲なかつせは吾それ髮を被り衽を左にせんと言つたのに明かで、この頃には周の諸侯の國の間に戎狄蠻夷の國がま

だ介在して、その中には隨分兵を興して侵略掠奪などをやるものもあつて、桓公などは諸侯の軍の總司令となつて之を擊ち攘つたのである。この戎狄には山戎犬戎白翟赤翟等があつて、周の王室でも諸侯でもその酋長と婚姻を結んだ例があり、曾の如きは戎の諸部落を懷柔して戰爭の時に之を利用したものである。此の如き蕃族の存在が戰國に至れば徹すべき記事の無くなつてゐるのは、多分自然に同化されて獨立した異種の部落として成立せぬ爲めと想はれる。

同化作用の進行は文化の大小の中心から周邊に及ぶのであるから、その境界線が判然と分らぬのは當然であつて、春秋の頃に既に同化が非常に進んでゐた地方にも、原とは蕃族の部落であつた小國があつた樣である。孔子が季氏が魯の附庸國たる顓臾を伐たんとした時に先王が東蒙の主即ち東蒙（蒙山の神）の祭りを主らせた部落であるから之を亡すのは以ての外であるといつた。祖先崇拜が尊重された支那古代では敵の場合でも血食即ち年々犧牲を具へて祭ることが絕えぬ樣にすることに注意してゐる。宗廟社稷といふものが國家自身と同格に認められてゐた位である。故に言語風俗が同化された後にも永い間蕃民の部落又はその名だけの存立が續いたのである。

四、支那本部の漢民族以外の住民

今述べた春秋戰國の間に文獻に見えた三代民族及び戎狄といふ蕃族はおもに北支那にゐたもので、これ等は何れも西北又は北方から移住したものらしい。この外に東夷と南蠻といふものがある。山東

から江南地方に亘つてゐる。又た西南には巴人氏人が巴蜀の地方にゐた。

東夷の中著名なのは山東東部の半島に萊夷(萊州)がある。その南に淮夷徐夷がある。これ等は周の初めに屢々兵力を用ゐて征伐する必要が起り、徐の偃王などはその中で最も有力な酋長であつた。

揚子江の南には吳(勾吳)越(於越)が東部で有力な民族であつて、徐夷に後れて春秋の末に各覇を稱した。楚は湖北と四川の界ひにゐた熟蕃の一つであつて、強大となつて大平野の西南隅に割據して、その周圍の諸蠻人を征服して覇を稱した。

これ等は何れも春秋時代に既に支那文化によつて同化されてゐたが、その南には浙江省の南部か福建廣東に至る沿岸地方に閩(東越)甌等の蕃民がゐた。寧波語、厚門語等の方言の行はれる地方の現在住民の祖先は此の如き蕃民がゐるらしい。漢の東越王は姓を騶氏といふのから推せば、魯國の鄒といふ所なども或はこの東越民族の一派の部落の名殘りでないかと想像される。

この地方の山奥に今尚ほ畲蠻といふのがゐるが、これは東越人の後である。その同族は兩漢以後までも安徽江西等の地方の山地にゐて山越と呼ばれてゐる。今の畲蠻といふのはその最後の名殘りである。

これより西の內部地方には苗族がゐる。戰國の時に吳起は彭蠡澤(鄱陽湖)を右にし、洞庭を左にしてゐたといふから、江西と湖南の間の地方一圓に廣がつてゐたらしい。然るに今は貴州省の東から南

に亘つて湖南廣東廣西雲南の省堺の山地に限られてゐる。これは多分上古は内部の地方で最も勢力ある大民族で、その内漢民族と接觸す江南省であつて、その間に衝突のあつたことが誇大されて傳説となつたものであらう。

長安洛陽の漢民族文化の中心から西南には漢水涪水及び岷水の流域が最も近い地方があつて、此處には巴人、濮人(卜人)蜀人等がある。これ等は兩漢の間に大抵同化されたらしいが、その民族の一部の江南にゐるもの四川盆地の山中にゐるもの等は餘程後までも蕃人として續き、今も西蕃、蠻子、獰々などが西藏堺の高山にゐる。又た雲南廣西の高原地方には夷家中家猺などいふ蕃族が分布してゐる。此等の地方の蕃族の中で最も古く特有の文化を有してゐたのは四川盆地の蜀人で、漢代に揚雄が蜀王本記を著はして、その事蹟を記載した。今その斷片は干寶の華陽國志に見ゐ、巨石文化の遺蹟やその他民俗學上面白い傳説が種々ある。就中堯舜の禪讓及び禹の治水に關する傳説が變つた形で傳はつてゐるのは注意すべきである。この蜀人は氐羌の一派であらうから、夏、殷、周三民族と共通の洪水傳説がその南に接したこの氐羌の間にも行はれてゐたことが知れる。

これ等の南方の民族の多くは西藏高原の東邊から降つて來たもので氐羌等はその東北隅から降り、その南の四川から雲南の方にはそれと異つた西藏民族の他の支族がゐる、更に南には印度支那に分れて行つたシャンといふ東南邊の支族がゐる。

又た沿岸の蕃族は馬來諸島のものゝ仲間であるらしく、これ等は多分は漢民族の西北方から入り込む前にゐたらしく、雕題とか黑齒とかいふ樣な熱帶蕃族の風俗を以つて區別して先秦の文獻に見えてゐる。

以上に述べた所は甚だ不十分であるが、要するに秦漢の郡縣を置いた頃には江南の揚子江流域の諸平地は餘程開發されてゐたことが知れる。然れどもその文化が傳播しても山間の僻地はその後今日までも蕃族が殘つてゐる。今も四川雲南には土司なるものがあるのは、蕃人の酋長をして蕃人を統御させるといふ方針に出てゐる。

學書三昧

武內義雄

人は自己の職業に精進しなければならぬことはいふまでもないが又同時にその職業から解脫して遊戲する境地もなくてはならぬ。これなき人は實に氣の毒千万なもので筆者も正にその一人である。音樂は解らず運動は嫌ひ、まして圍碁や骨牌には尙更ら興味を覺えぬ、さりとて書畫骨董をいぢる樣な